

100号記念号に寄せて

社長 宮崎 薫

「鐵輪」が創刊より、100号を迎えました。

振り返ってみますと、創刊号は平成4年（1992年）4月でした。正に平成のバブル景気が崩壊し年を重ねる毎に厳しさを増す大変な時代を迎えようとしている時、宮崎精鋼の社員や家族、又関連会社の人達も一緒になって、ベクトルを合せ、連絡しあえる情報誌であり又話題作りの雑誌であればと思いスタートしたものです。

因にこのタイトル「鐵輪」は、677通という大変多くの応募の中から選んだもので当時のこの社内報に寄せる皆の関心が如何に高かったかが判ると思います。つけ加えるならば私もタイトルに負けない様、一夜漬けの習字の練習をして、題字を書いた事を覚えています。

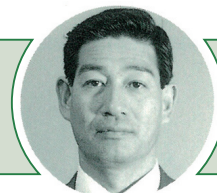
あれから23年目、100号という記念号を迎えたわけです。本当に大変な時代、紆余曲折があり、廃刊の危機もありました。しかし宮崎精鋼も関連会社も共々に、苦難を乗り越え今では当時想像もつかない様な立派な会社になっています。これら時代の変遷を一号一号に掲載されており、再度振り返って読むと感慨深いものがあります。

鐵輪は囲炉裏の中に置いてある五徳です。社員が車座になり、酒を酌み交しながら、「昨日のこと」「今日のこと」そして「明日のこと」を語り合うような社内報であって欲しいと思っています。「温故知新」「不易流行」とは素晴らしい言葉です。どうかこれからもこの精神で、更なる革新をしながら号を重ねましょう。



【創刊号より掲載記事抜粋】

「鐵輪」の創刊にあたって



平成4年4月

代表取締役社長 宮崎 薫

「鐵輪」がいよいよ創刊されることになり、本当に嬉しく思います。そして編集委員の方達の努力に心よりお礼申し上げます。又この社内報のタイトルを募集したところ本当に多勢の人達が応募され関心の深さに驚きました。六百を越す応募の中から「鐵輪」が選ばれましたが、この名前をつけて下さった長嶋勝喜さんありがとうございました。そしてお目出度うございます。又惜しくも外れた中にも大変いい作品も数多くありました。最終的に、編集委員の人達の選んだ何点かの中から私がこの「鐵輪」を選びました。当初この文字を目にした時、これは何か意味があるのではと思ひ広辞苑を開いてみたところやっぱりありました。「鐵輪」は「かなわ」と呼び鉄製の輪のことですが、これは、五徳（ごとく）といって、火鉢や囲炉裏の炭火の上に置く、四脚又は五脚ついている鉄の輪のことです。「あ、そう言えば、昔の上に網を置いて餅を焼いたりしたなあ」なんて思い出した方もいるでしょう。そしてこの外に、儒家の重んずる五つの徳、温・良・恭・儉・讓の稱、一、兵家の重んずる五つの徳、智・信・仁・勇・嚴の稱と出ています。どうですか、大変意味深長でしょう？しかしまあそんな難しい解釈より、やっぱり囲炉裏を囲んで皆で仕事を終えた一時の団らんがいいですよね。

さて私達は鉄と生活を共にしていますが、人間が初めて鉄を手にしたのは約五千年も前のことで、隕鉄を拾ったのが最初であるとか露出している鉄鉱石が山火事何かで偶然発見されたとかいわれていますが、以来鉄は、様々な国でその文明や文化を築き、歴史と深く切りながら現在に引き継がれています。それ程鉄は人類にとってすばらしい資源であり、時代と共にその鉄の性質を生かし、より上手に使われ進歩しつづけています。例えばちよつと前まで鉄に対するイメージは、重い・硬い・黒い・冷たい・錆びる等でした。ところが今ではこれらと全く逆の性質を持った鉄が続々と登場し、例を上げれば枚挙のいとまがありません。現在の高度なニーズに応えるような鉄がどんどん生み出されているのです。正に鉄は「金を失う」のではなく、鐵であって「金の王たる哉」と書くべきでしょう。

ともかく私達はこんな素晴らしい資源である鐵を生活の糧として生活を立てています。昔の人達に負けない様、より良い利用方法を見つけだし、仕事に頑張らねばと思います。そして一日の仕事が終わったら、鐵輪のある囲炉裏を囲み、宮崎の人も、又グループ会社の人も皆集まって話をしましょう。昨日のこと、今日のこと、明日のことを語り合います。そんな社内報「鐵輪」に育って欲しいと思います。